お祖師さまを巡る人々 第6回

高祖日蓮大士ご降誕 800年慶讃

お祖師さま（高祖日蓮大士）のご信者のなかで、【四条金吾】さんは、先々月号（四月号）と先月号（五月号）でお話した富木常忍さんとともに、とても頼りにされていたご信者の一人なんだよ。【四条金吾】さんは、つねに教えを求め、純粋（他の事は考えないで、その事だけを思うこと）な気持ちでまじめにご奉公された人なんだ。今回は、この【四条金吾】さんについてのお話をするね。

四条金吾 ①

【四条金吾】さんの正式な名前は【四条中務三郎左衛門尉頼基】というんだよ。とても長い名前だけど【左衛門尉】というのは、天皇などを警備（守ること）する仕事をしている人のことをいうんだ。

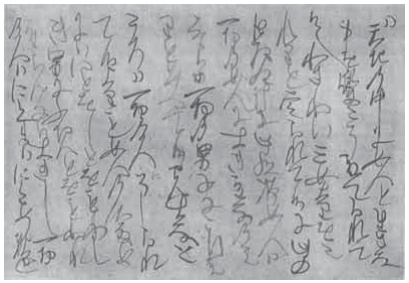
この【左衛門尉】を、中国（唐の時代）では【金吾】といっていたんだ。そこで長い名前を呼ぶのも大変だったので略して（簡単にして）【四条金吾】と呼ばれていたんだ。

【金吾】さんの誕生は、はっきりとわかっていないんだけど寛喜二年（一二三〇）ころといわれているんだ。お祖師さまが承久四年（一二二二）のお生まれだから、八歳ぐらいの年の差なんだよ。ちょうどお兄さんと弟といった感じだね。

【金吾】さんは、鎌倉幕府執権・北条家の一族（血のつながりのある人たち）の江間家に仕え（目上の人のそばにいて、その人のために働く）ていたんだよ。

そして、武術（剣・弓・馬・槍など、武士として戦うのに必要な技術）や、医術（病気やけがをなおすための技術）にも卓越（他より、はるかにすぐれていること）した人物だったんだね。

【金吾】さんには、奥さんの由比乃（日眼女）さんとの間に、月満御前と経王御前という二人の女の子がいたんだ。この二人の子どもの名前は、お祖師さまがつけてくださったんだよ。【金吾】さん夫婦はご信心に励みながらも、二人の子育てにとても頑張ったんだね。



四条金吾殿女房御返事（ご真筆）
四条金吾の妻である日眼女が、33歳の厄年にあたり御供養されたことへの返書。夫婦揃って熱心なご信者であったことがわかる

四条金吾は、容姿・風貌もさることながら、人格的にも勝れた「あっぱれな男だ」と伝えられている

お祖師さまとの出会い

【金吾】さんは、はじめ建長寺の道隆という僧侶について禅宗の信心をしていたんだ。

建長八年（一二五六）二十七歳のころ、鎌倉で辻説法（道や通りを行ったり来たりする人に仏様の教えを説き聞かせること・平成三十年十月号の佛立新聞『お祖師さまをお訪ねする物語第十回』を読んでね）をされていたお祖師さまに出会うんだよ。

【金吾】さんは、熱心な禅宗の信者だったので、お祖師さまが辻説法で「御題目のご信心が真実の教えで、仏様の一番の法」と説かれることにとても腹を立てていたんだね。そこで、お祖師さまに仏様の教えについていろいろと質問をされたんだ。

お祖師さまは【金吾】さんの質問に、とてもわかりやすく親切に答えられたんだよ。そんな慈悲（苦しみを取り楽を与えたいという心）あふれるやさしい答えに、【金吾】さんは大変感動したんだね。

そこで、同じ禅宗の信心をしていた池上宗仲（兄）・宗長（弟）さんの兄弟や工藤吉隆さんと共に、お祖師さまの教えを信じて御題目のご信者となったんだよ。

ご信者となってからの【金吾】さんは、つねに教えを求め、純粋な気持ちでまじめにご信心ご奉公に励まれたんだ。

（つづく）

四条金吾邸址の石碑（収玄寺境内）
鎌倉の四条金吾邸は現在は収玄寺というお寺になっている。石碑の文字は日露戦争時の連合艦隊司令長官・東郷平八郎の揮毫によるもの

お祖師さまの辻説法（野田九浦・作・1907）
この辻説法で四条金吾、池上兄弟、工藤吉隆など、多くの人々が御題目のご信者となった